



日本学士院ニュースレター

2016. 4 No. 17



学びのススメ講演会

平成 27 年 12 月 12 日、中学生・高校生を対象とした学びのススメ講演会が山中伸弥会員を講師として行われました。(関連記事 10 ページ参照)

目次

平成 28 年度日本学士院賞.....	2	第 31 回国際生物学賞授賞式.....	1 1
新会員選定.....	5	大村 智会員がノーベル生理学・医学賞受賞....	1 2
第 12 回日本学士院学術奨励賞.....	6	第 64 回公開講演会のお知らせ.....	1 2
新客員選定.....	8	『学問の山なみ』から—歴史をつくった会員—.....	1 3
サー・キース・トマス客員を招へい.....	8	会員寄稿(根岸 隆会員).....	1 4
李 賢宰客員を招へい.....	8	第 6 回日本学術振興会育志賞授賞式.....	1 5
学士院の歩み.....	9	会員の逝去.....	1 6
講演会レポート.....	1 0	会員の近刊紹介.....	1 6
第 10 回日韓学術フォーラム.....	1 1	編集後記.....	1 6

平成 28 年度日本学士院賞

平成 28 年 3 月 14 日開催の第 1097 回総会において、日本学士院賞 9 件 9 名（うち森 和俊氏には恩賜賞を重ねて授与）、日本学士院エジンバラ公賞 1 件 1 名を決定しました。第 106 回となる授賞式は 6 月に举行される予定です。

恩賜賞・日本学士院賞

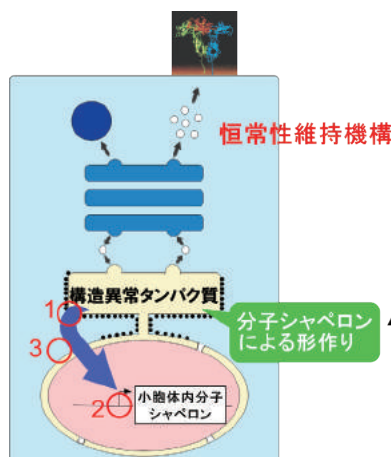
「小胞体ストレス応答の発見と解明」

森 和俊（もり かずとし）

京都大学大学院理学研究科教授



出芽酵母小胞体ストレス応答のシグナル伝達経路を解明し、さらに哺乳動物小胞体ストレス応答の主要なシグナル伝達経路を解明したことによって、小胞体ストレスに起因する様々な疾患の予防・治療法開発への道を開いた。



森 和俊氏は、出芽酵母と哺乳動物について次の 3 つを解明した。

1. 構造異常タンパク質の小胞体内蓄積を感知するセンサー機構
2. 小胞体中存在する分子シャペロンの転写を核内で活性化する機構
3. 小胞体内情報と核内転写とをつなぐ仕組み

日本学士院賞

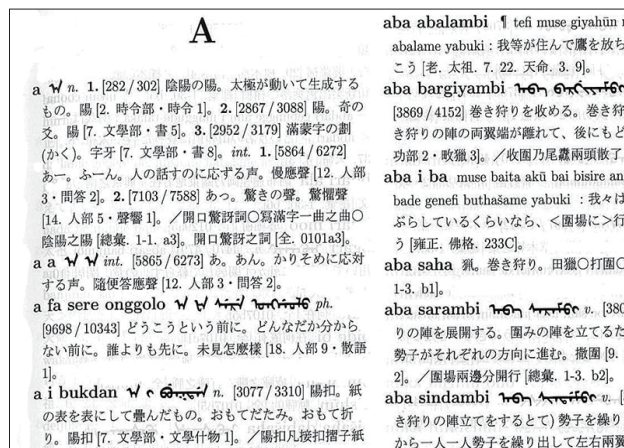
『満洲語辞典』

河内 良弘（かわち よしひろ）

京都大学名誉教授、天理大学名誉教授



17 世紀前半、中国に進出して清朝を樹立した満洲族の言語である満洲語の辞書を完成した。語彙数は約 4 万。満洲語資料を読むための充実した最新・最良の辞書として、世界の満洲学研究の進展に大きく貢献することは必定である。



『満洲語辞典』（松香堂書店、平成 26 年）

日本学士院賞

『戦後日本公害史論』

宮本 憲一（みやもと けんいち）

大阪市立大学名誉教授、滋賀大学名誉教授



戦後日本の深刻な諸公害は、住民の健康被害を無視した企業と公害防止を怠った政府や学界によるシステム公害であり、それゆえに被害者である地域住民が住民運動と裁判闘争によって公害の克服に努めなければならなかった歴史を、初めて本格的に実証した。

『戦後日本公害史論』（岩波書店、平成 26 年）目次

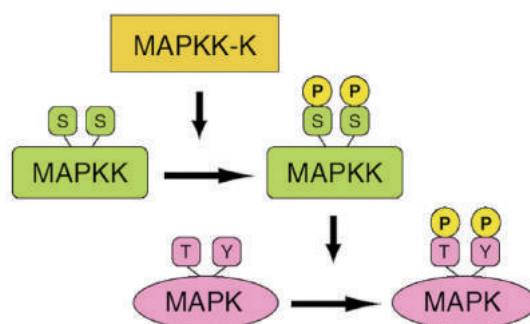
- 序章 戦後日本公害史論の目的と構成
- 第 1 部 戦後公害問題の史的展開
- 第 1 章 戦後復興と環境問題
- 第 2 章 高度経済成長と公害問題
- 第 3 章 公害対策の展開
- 第 4 章 4 大公害裁判
- 第 5 章 公共事業公害と裁判
- 第 6 章 公害対策の成果と評価
- 第 2 部 公害から環境問題へ
- 第 7 章 戦後経済体制の変容と環境政策
- 第 8 章 環境問題の国際化
- 第 9 章 公害対策の転換と環境再生
- 第 10 章 公害は終わっていないー補論
- 終章 維持可能な社会（Sustainable Society）
- あとがきー歴史は未来の道標

「MAP キナーゼ並びに関連シグナル
伝達経路の分子機構と機能の解明」

西田 栄介 (にしだ えいすけ)
京都大学大学院生命科学研究科教授



細胞の増殖や分化を制御するタンパク質リン酸化酵素、MAP キナーゼを発見し、その活性化機構を明らかにした。そして、MAP キナーゼによるタンパク質リン酸化が卵母細胞の成熟過程や胚の発生過程に重要な働きをしていること、動物の寿命をも規定することを示した。



タンパク質キナーゼの連鎖反応（カスケード）

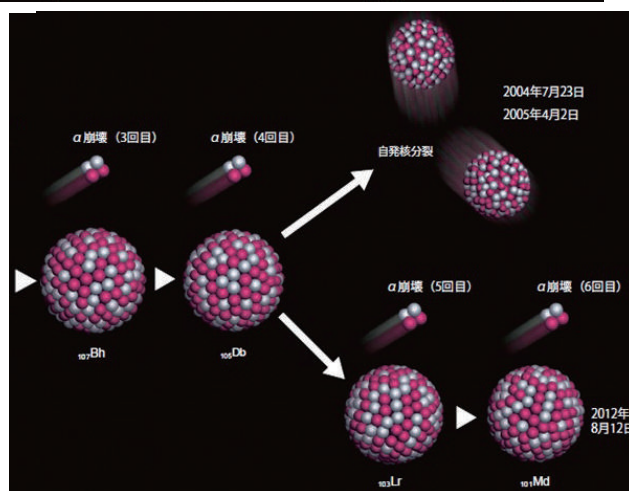
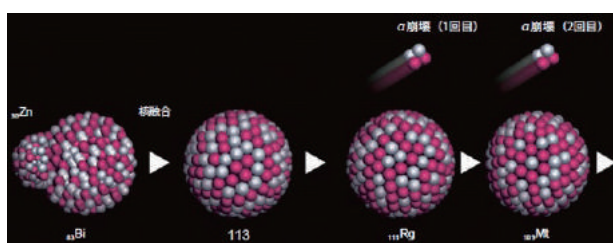
「113番超重元素の発見」

森田 浩介（もりた こうすけ）

九州大学大学院理学研究院教授、
理化学研究所仁科加速器研究セン
ター超重元素研究グループ・グル
ープディレクター



理化学研究所を中心とする研究チームを率いて実験を行い、核融合反応によって合成される 113 番超重元素を発見した。この超重元素生成の確率は極めて小さく、加速器強度の増強と検出装置 GARIS の開拓が実験成功の鍵であった。この発見により、アジアで初めて元素の名称と記号の命名権を得た。



113 番超重元素の合成と核分裂の過程

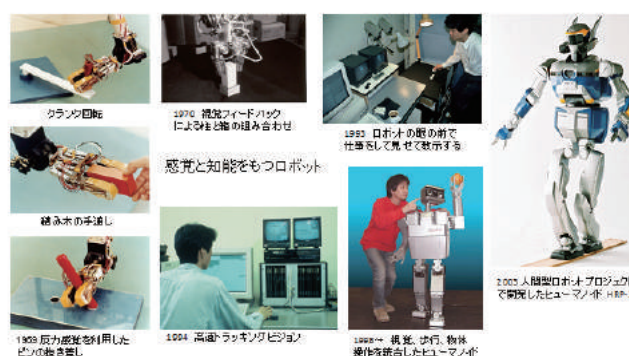
「感覚と知能を持つロボットの基盤技術の開拓」

井上 博允 (いのうえ ひろちか)

東京大学名誉教授、カワダロボティクス（株）取締役技師長



反力の感覚に基づく巧みな動作の実現、高速相関演算による実時間視覚、人型知能ロボットの開発など、感覚と知能を持つロボットシステムに関する数々の先駆的研究を行い、この分野を開拓・先導してきた。



日本学士院賞

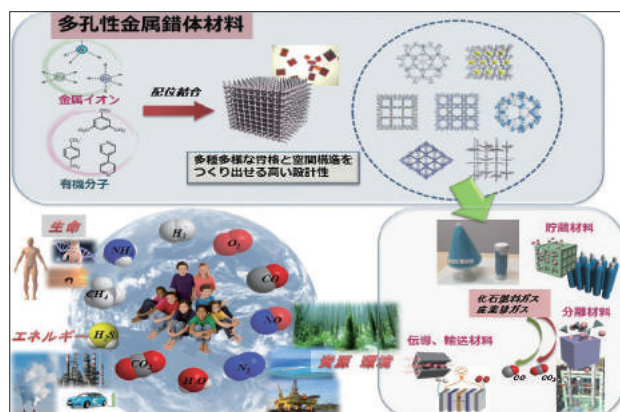
「多孔性金属錯体材料の創製と応用に関する研究」

北川 進（きたがわすすむ）

京都大学物質-細胞統合システム拠点長・教授、京都大学大学院工学研究科教授



金属イオンと多配位性有機分子の結合を利用して、ナノメートルの精度で構造制御された多孔性金属錯体材料を開発し、環境、エネルギー課題に関わる気体物質の安全貯蔵・輸送、選択分離、高効率化学変換を可能にした。



日本学士院賞

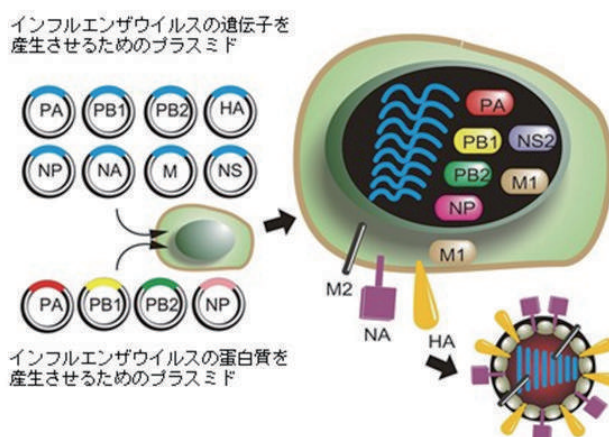
「インフルエンザウイルスの病原性の分子基盤解明とその制圧のための研究」

河岡 義裕（かわおか よしひろ）

東京大学医科学研究所教授、米国ウイコンシン大学獣医学部教授、東京大学医科学研究所感染症国際研究センター長、京都大学客員教授



インフルエンザウイルスを効率よく人工合成する技術を開発した。本技術は、ウイルスの病原性発現と伝播機構の解明並びにワクチン製造ウイルス株の作出に利用され、世界の保健衛生に寄与している。



細胞に、インフルエンザウイルスの遺伝子と蛋白質を産生させるためのプラスミドを導入すると、感染性のあるインフルエンザウイルスが細胞から放出される。

日本学士院賞

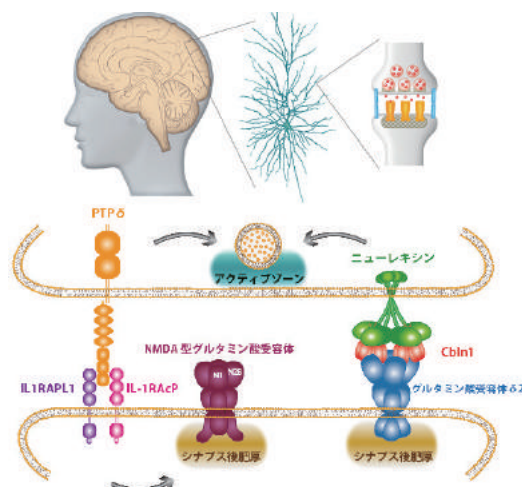
「シナプス分子と記憶・学習に関する研究」

三品 昌美（みしな まさよし）

立命館大学総合科学技術研究機構教授、東京大学名誉教授



脳神経細胞の繋ぎ目である、シナプスの形成や可塑性を制御する分子群を明らかにし、これらのシナプス分子が記憶・学習の基盤となることを示した。また、脳高次機能を分子レベルから理解する分野の開拓に貢献した。



シナプスの可塑性や形成を制御する分子群は脳の神経細胞ネットワークの構造と機能を変化させ、代表的な脳高次機能である記憶・学習を担っている。シナプス分子の異常は精神疾患の発症と関連することが明らかになってきた。

日本学士院エジンバラ公賞

「植物ホルモン・ジベレリンがもたらす種の保全確保と植物多様性ならびに食糧生産性向上に関する研究」

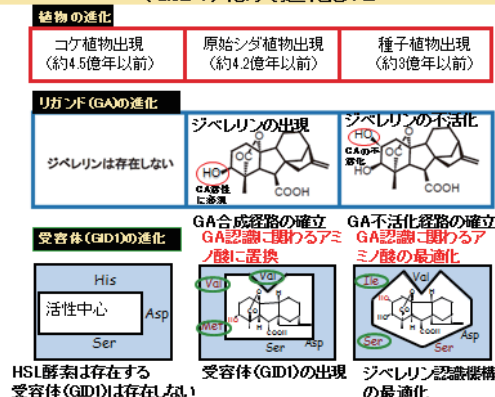
松岡 信（まつおか まこと）

名古屋大学生物機能開発利用研究センター教授



植物成長ホルモン・ジベレリン受容体の発見と受容機作の研究から、植物進化過程で酵素が受容体に変化したことや、シダでは性決定にも関与することを示すと共に、ジベレリン量の調節による収量増産への道を拓いた。

植物の進化過程においてリガンド (GA) と受容体 (GID1) は共進化した



新会員選定

平成 27 年 12 月 14 日開催の第 1094 回総会において、日本学士院法第 3 条に基づき、次の 4 名を新たに日本学士院会員として選定しました。



野中 郁次郎（のなか いくじろう）

第 1 部第 3 分科

専門分野：経営学

現職：一橋大学名誉教授、一橋大学大学院国際企業戦略研究科特任教授、米国カリフォルニア大学バークレー校経営大学院ゼロックス知識学ファカルティ・フェロー、立命館アジア太平洋大学客員教授、早稲田大学特命教授

日本企業と米国企業の実践的な比較研究によって、日本企業の経営の強みが組織的な知識創造にあるという洞察のもとに、組織的知識創造理論を新たに提示し、日本のみならず世界における経営学の発展に多大な貢献をした。この理論は欧米の経営学者や実務家にも広く受け入れられている。



岩井 克人（いわい かつひと）

第 1 部第 3 分科

専門分野：経済学

現職：国際基督教大学客員教授、東京大学名誉教授

経済学、特に、最適成長理論、不均衡動学理論、シュムペーター動学、貨幣論などの経済理論をはじめ、法人論、会社論、信任論においても優れた研究を行った。その研究の独創性と先駆性は、国際的に高く評価されている。



諸熊 奎治（もろくま けいじ）

第 2 部第 4 分科

専門分野：理論化学

現職：京都大学福井謙一記念研究センター FIRC リサーチフェロー、米国エモリー大学名誉教授

分子の構造・機能・反応を設計するための理論化学・計算化学を構築し、オニオム法の開発、分子間相互作用、化学反応理論、触媒反応理論、炭素ナノ構造生成機構理論などに、世界に冠たる成果をあげた。



森 謙治（もり けんじ）

第 2 部第 6 分科

専門分野：農芸化学

現職：東京大学名誉教授、東洋合成工業（株）顧問、理化学研究所客員主管研究員

ホルモンやフェロモンなど生物に必須である化合物の立体選択的化学合成の分野を開拓した。植物ホルモンであるジベレリンの合成や、各種害虫を含む昆虫のフェロモンの合成と立体構造の解明で世界的に評価されている。

第12回日本学士院学術奨励賞

平成28年1月12日開催の第1095回総会において、第12回日本学士院学術奨励賞の受賞者6名を決定しました。2月24日には秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと、日本学術振興会賞と同時に授賞式を挙行了しました。



「近世近代インドネシア地域社会の全体史的研究：環境、国家、イスラーム、外来商人・移民、グローバル経済の影響」

太田 淳（おた あつし）

広島大学大学院文学研究科准教授

ジャワ島西部に成立した港市国家バンテン王国を舞台に、18-19世紀におけるグローバル経済の変容と王国の政治経済、植民地支配と地域社会の変貌過程を、現地住民の能動的な営為を掘り起こしながら見事に描きだし、内外の学界において高く評価された。



「自然免疫における炎症調節分子機構の解明」

竹内 理（たけうち おさむ）

京都大学ウイルス研究所教授

炎症や免疫反応に関わる新規リボヌクレアーゼ Regnase-1 を同定し、サイトカイン等炎症に関わる分子群が mRNA の不安定性のもとで制御されていることを証明し、新たな免疫制御の仕組みを明らかにした。



「『辻が花』の誕生——〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学」

小山 弓弦葉（おやま ゆづるは）

国立文化財機構東京国立博物館学芸研究部工芸室長

夏の単衣仕立ての帷子として室町時代に登場した「辻が花」が、どのようにして縫い締め絞りで模様を染めた裂として現在認識される「辻が花」に変容したかを解明することを通じて、染織をめぐる社会と文化のあり方を浮き彫りにした。



「常時地球自由振動現象の研究」

西田 究（にしだ きわむ）

東京大学地震研究所准教授

地球全体が常に振動しているといういわゆる常時地球自由振動現象の発見とその励起源の探索を通じて、固体地球と大気・海洋圏の振動現象とを同じ枠組みで理解しようとする地震学の新しい流れを一貫してリードしてきた。



「植物病害ブドウ根頭がんしゅ病の生物的防除法の開発」

川口 章（かわぐち あきら）

岡山県農林水産部主任

植物根頭がんしゅ病は土壌細菌が起こす腫瘍病である。川口氏は非病原菌株を接種する方法により、初めてブドウ根頭がんしゅ病の防除を可能にした。農薬を使わず、自然界の拮抗菌株を用いる防除法は他の作物にも有効である。



「有限符号長の情報理論及び量子情報理論の研究」

林 正人（はやし まさひと）

名古屋大学大学院多元数理科学研究科教授

情報通信速度におけるシャノンの理論値に近づく有限符号長の性能評価の理論体系を確立、その枠組みの中で情報理論の多くの重要問題を解決し、また理論を量子情報系に拡張するなど、情報符号化の基礎理論に大きく貢献した。

＜学術奨励賞受賞者寄稿＞

「東南アジアの「全体史」への挑戦」

広島大学大学院文学研究科准教授 太田 淳（2016年4月より慶應義塾大学経済学部）

私が東南アジアに関心を持ったきっかけは、大学3年生の時の一人旅です。私はどう生きたいのか分からなくなり、誰も自分や自分の大学のことを知らない世界を旅してそれを考えてみたいとなぜか思いました。タイに行ったのは、持ち金の額からしてそのあたりが限界と考えたからです。言葉は少し勉強しましたが、意思疎通はおぼつかないものでした。それでも村々を歩いて、人々に歓迎され食事に招かれたりするうちに、自分がこの世界で生きていけるような気がしました。

この時の経験は私の研究を決定づけたように思えます。それまでの島嶼部東南アジアの近世史研究は国家史が中心で、国家が衰退した18世紀は社会全体が荒廃したかのように記述される傾向がありました。私はそれよりも地域社会の人々がどのような行動を取り、それにどんな意味があったのかを知りたいと思いました。

オランダに留学し、資料がある程度読めるようになると、毎日文書館に通いました。すると18世紀のオランダ東インド会社資料に、ジャワの地域社会の人々のことが豊富に記されているのに驚きました。そこに描かれる人々は、決して国家の衰退とともに活力を失うのではなく、いつもしたたかにチャンスを探していました。むしろ

国家の管理が弱まるのを利用して、地方エリートは自分の権力基盤を強化し、農民は産品を「密輸商人」や「海賊」に売って利益を得ました。こうした人々の行動から歴史を理解しようとするうちに、やがて18世紀の地方エリートの権力拡大が19世紀の社会基盤を構成したこと、「密輸」や「海賊」と呼ばれた取引が東インド会社を介さない新たな貿易構造を成していたことなどが見えて来ました。

気候などの環境や人口にも関心を持ったのは、「全体史」を提唱したブローデルに感化されたからですが、学生時代に東南アジアで蒸すような大気や人々の熱気に圧倒された経験にも影響されています。そして環境や人口について断片的な情報を集めていくうちに、それらが人々の経済活動や地方政治の展開とつながりがあるのが見えてきました。

一見意味の無いような歴史事象を集めて分析し、そこから全体史的に大きな社会変容を読み取るのは歴史学の醍醐味です。特にそれが無名の人々の行動に関わる事象である場合、多くの読者に歴史を知る感動や興奮を伝えられると私は信じています。今後も研鑽を重ね、そのような読後感を与えられる著作を作っていきたいと思います。

日本学士院学術奨励賞・日本学術振興会賞授賞式（平成28年2月24日）



賞状及び賞牌を授与される受賞者（太田 淳氏）



記念茶会で受賞者とお懇談になる秋篠宮同妃両殿下



白川英樹選考委員会委員長
による審査経過報告

新客員選定

平成27年11月12日開催の第1093回総会において、日本学士院法第6条に基づき、わが国における学術の発達に関し特別に功労のあった外国人としてアマルティア・K・セン博士を新たに日本学士院客員に選定しました。



Photo by Zack Seckler

アマルティア・K・セン

(Amartya K. Sen)

現職：ハーヴァード大学経済学部・
哲学部教授、トーマス・W・
ラモント特任教授

出生地：インド

専攻学科目：経済学・哲学

アマルティア・セン教授は、厚生経済学および正義論を中心とする倫理学・政治哲学において独創的な業績を挙げて、1998年ノーベル経済学賞を受賞した第一級の経済学者・哲学者である。氏は、厚生経済学の射程を大きく延長して、所得と富の分配の衡平性や、個人的権利と社会的福祉の整合性など、規範的な経済学のプロンティアの開拓に貢献するとともに、貧困・飢饉・飢餓など焦眉の社会問題の解決にも関与して、純粋理論と公共政策の連結環を発見する作業に積極的に取り組んできた。氏の研究は、日本の経済学・政治哲学の研究にも、多大な影響を及ぼしてきた。東日本大震災の過酷な経験の研究を日本の学術界に定着させるために震災研究の東京センターが発足した折にも、氏は心に沁み入る基調講演を行って、深い感銘を与えたことも付記しておきたい。

サー・キース・トマス客員を招へい

サー・キース・トマス客員を平成28年3月17日から30日まで招へいしました。サー・キース・トマス客員は英国近代史を専門とするイギリスを代表する歴史家で、英国学士院長や、オックスフォード大学教授、同大学コーパス・クリスティ学寮長などを歴任されました。代表作『宗教と魔術の衰退』（1971年）を始め、複数の著書が日本語に翻訳されています。

3月19日には日本学士院を訪問し、メダルの贈呈、役員や会員との懇談を行ったほか、記念講演を行いました。（10～11ページ参照）



杉村 隆院長よりサー・キース・トマス客員にメダルを贈呈

李 賢宰客員を招へい

日本学士院客員の李 賢宰（イ・ヒョンジェ）博士（大韓民国学術院会員・元会長、ソウル国立大学校名誉教授）を平成28年3月21日から25日まで招へいしました。李客員の専門は経済学で、韓国経済発展の特性を明らかにすることで業績を挙げたほか、日韓両国の経済協力の意義を説くとともに、両国の学術交流に尽力してきました。3月23日には日本学士院を訪問し、メダルを贈呈したほか、役員や会員との懇談を行いました。



杉村 隆院長より李 賢宰客員にメダルを贈呈



李 賢宰客員と役員・会員で記念撮影

学士院の歩み 第10回 賞の歴史 (大正・昭和時代)

日本学士院は、明治6(1873)年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12(1879)年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39(1906)年に帝国学士院に改組し、昭和31年に現在の日本学士院となりました。

このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介します。

明治44(1911)年に恩賜賞が創設され、同年7月5日に第1回授賞式が行われた。ついで、同年11月に帝国学士院賞(現在の日本学士院賞)が創設された。以降、授賞式は毎年1回行われるのが恒例となった。やがて、恩賜賞・学士院賞について様々な賞が創設された。

内閣総理大臣も務めた公爵桂 太郎は大正2(1913)年に逝去し、故桂公爵記念事業会が組織された。大正6(1917)年2月、同会より桂学術奨励基金として2万円を寄附し、一部を社会に多大の貢献をしたと認められる研究者への賞として授与し、それ以外を研究補助として使用されたいという申し出があった。これを受けて桂公爵記念賞が創設され、第1号は翌大正7(1918)年の第8回授賞式において、瀧本誠一の「日本経済叢書」に贈られた。本賞は賞金のみで他の賞のように賞牌は授与されなかった。桂公爵記念賞の授賞は、昭和4(1929)年の第19回授賞式まで6回行われた。

大正12(1923)年には、大阪毎日新聞社と東京日日新聞社から、東宮(のちの昭和天皇)の御成婚を記念して、学術奨励金として10年間毎年1万円ずつ寄附したいという申し出があった。うち4千円は賞として用いて欲しいという意向であったため、大阪毎日新聞東京日日新聞社寄附東宮御成婚記念賞が創設された。翌大正13(1924)年、廣瀬治兵衛「和鏡聚英 続和鏡聚英」、清水武雄「放射線ノ研究ニ使用スル膨張器ノ研究」、田代四郎助「神経組織ノ炭酸発生並ニ炭酸ノ微量測定法ニ関スル研究」の3名が第1回受賞者となった。賞牌は京都帝国大学教授の武田五一が製作した。

東宮御成婚記念賞は、昭和18(1943)年まで続けられ受賞者は35名に上ったが、翌昭和19(1944)年に帝国学士院賞に改称(統合)されている。

昭和5(1930)年には、外人教師として招かれたトマス・E・メンデンホールの遺志によるメンデンホール記念賞が創設される。

メンデンホールは、明治11(1878)年、先に来日し

ていたE・S・モースの紹介で物理学教師として東京大学に招かれ、物理学や天文学などを講義した。彼の日本滞在は4年足らずであったが滞在中の待遇を生涯忘れず、大正4(1915)年になって、同僚であった菊池大麓(当時の帝国学士院長)を通じて、日本の学術振興のための奨学金を寄附することを申し出たのである。菊池はメンデンホールの教え子の藤澤利喜太郎、田中館愛橘(ともに学士院会員)に諮り賞の創設を申し合わせたが、メンデンホールは大正13(1924)年3月、米貨2,500ドルを寄附する旨の遺言を残して82歳で亡くなった。

翌大正14(1925)年1月、嗣子チャールズ・メンデンホールより提出された故人の遺志による寄附願を正式に受理し、物理学及び天文学の奨学金として邦貨6,483円33銭を受領することになったものの、メンデンホール記念賞の創設が決まったのは昭和5年。第1号の授賞は2年後の昭和7(1932)年、菊池正士「電子の廻折に関する研究」に対してであった。菊池正士は、本賞の創設に尽力した菊池大麓の四男である。

メンデンホール記念賞の第2号は、昭和13(1938)年に渡邊襄「光波長を規準とする基線測定に関する研究」に授与されるが、その後は中止されている。

同賞の賞牌は金で作られ、表にはメンデンホールの肖像、裏にはメンデンホールが重力観測を行った富士山が彫られている。金牌としたのは、メンデンホールの遺志で、賞牌は子孫にまで残り、子孫にインスピレーションを与えるからということであったという。

帝国学士院が創設した最後の賞は、伯爵鹿島萩麿記念賞である。昭和8(1933)年に逝去した山階宮菊麿王の第4王子である伯爵鹿島萩麿の遺志を受けた申し出によって設けられた。その遺志とは、学術奨励基金として10万円を寄附する、ただし一部は自然科学関係の賞金とするというものであった。第1号の賞は、昭和12(1937)年、金平亮三「南洋委任統治領フロラの研究」に贈られている。賞牌は赤銅製で、日本美術院同人平櫛田中が原型を製作した。伯爵鹿島萩麿記念賞は昭和20(1945)年6月12日に3名に授与されたのを最後に、鹿島家との協議によって中止されている。

以上のように、創設された賞は全て寄附金により運営された。寄附金は当初、学術奨励金特別会計として管理されたが、大正4(1915)年になり「帝国学士院学術研究奨励金委任経理ニ関スル法律」が公布され、授賞と学術研究費補助のために委任経理金として運用されることになり、現在に続いている。

講演会レポート

本院主催により、以下の講演会を開催しました。

1 第63回公開講演会

開催日 平成27年10月24日（土）

会場 日本学士院会館

根岸 隆会員が「ワルラスの樫の木」、岸本忠三会員が「免疫難病治療への新しい時代の到来—免疫調節因子(IL-6)の発見から創薬へ—」と題して講演を行いました。

根岸会員は一般均衡理論を打ち立てたスイスの経済学者レオン・ワルラスの書いた手紙の謎を追いつつ、彼が日本の経済学に与えた影響にも触れながら丁寧に紹介しました。また、岸本会員は自身の研究過程を振り返りながら、免疫治療の現在について写真や図絵を示しつつわかりやすく説明しました。聴講者は熱心に聞き入り、質疑応答も活発に行われ、講演は盛大な拍手とともに幕を閉じました。聴衆からは、「遠ざかっていた経済の勉強にまた興味を持って、良い機会になった。」「免疫における遺伝子工学の手法を利用する講義が興味深かった。」などの意見が寄せられました。(14～15ページに根岸会員の講演の要旨を掲載しています。)



根岸 隆会員



岸本忠三会員

2 日本学士院学びのススメシリーズ講演会

「iPS細胞—失敗の中からヒントを見つける—」

開催日 平成27年12月12日（土）

会場 日本学士院会館

本講演会は、将来を担う中学生・高校生に、学問への憧憬を抱かせることを目的として計画され、今回は第8回開催となりました。

講師の山中伸弥会員は、研究を始めるきっかけから、iPS細胞の作製に至るまでを、自身の経験を元に分かりやすく説明しました。講演の後半は、参加者数人ずつが組となってタブレット端末を用いたゲームを行い、iPS細胞の作製を体験しました。講演終了後は質疑応答が行われ、参加した中学生・高校生からは、数多くの質問が寄せられました。また、会場にはiPS細胞を顕微鏡で実際に観察できるコーナーが設けられました。



iPS細胞を作製するゲームを説明する山中会員



参加者からの質問に答える山中伸弥会員

3 サー・キース・トマス客員来日記念講演

開催日 平成28年3月19日（土）

会場 日本学士院会館

本講演会は、サー・キース・トマス客員の来日を記念して開催されました。演題は「What did it mean in early modern England to be 'civilized'? (近世英国にお

いて文明化が意味したもの)」で、講演は英語で行われました。サー・キース・トマス客員は、17世紀以降のイギリスで使われるようになった「野蛮」と「公民たるにふさわしい」という対概念を中心に文明化の意味を多角的に検討しました。講演後は、質疑応答が行われ、聴講者からいくつかの質問が出され、サー・キース・トマス客員はそれらに丁寧に答えました。



サー・キース・トマス客員



聴講者からの質問に答えるサー・キース・トマス客員

いました。その後、活発な討議が行われ、学術のみならず日韓交流においても大いに親睦と相互理解を深めました。



フォーラム参加者の記念撮影



フォーラム参加報告者の自由討議

第10回日韓学術フォーラム

平成27年10月6日から8日まで、大韓民国学術院との共同事業「第10教授会館において開催し、各分野の日韓両院会員約100名が参加しました。日本学士院からは塩野 宏幹事をはじめ、会員及び事務官計15名がソウルに赴きました。

10月7日午前は政治学の分野で、安 秉俊学術院会員が「Is an East Asian Community Feasible?」、佐々木 毅学士院会員が「現代民主政についての一考察」と題する報告を行いました。また、午後は物理学の分野で、宋 熙星学術院会員が「新しい粒子を探してーヒッグス(Higgs)粒子の発見まで」、小林 誠学士院会員が「CP対称性の破れとBファクトリー実験」と題する報告を行

第31回国際生物学賞授賞式

平成27年12月7日、国際生物学賞委員会（（独）日本学術振興会に設置、委員長 杉村 隆院長）主催による授賞式が本院を会場として挙行されました。

この賞は、昭和天皇のご在位60年と長年にわたる生物学のご研究を記念するとともに、本賞の発展に寄与されている今上天皇の長年にわたる魚類分類学（ハゼ類）のご研究を併せて記念し、生物学の奨励を図るものです。

今回の授賞分野は細胞生物学で、受賞者は、東京工業大学フロンティア研究機構名誉教授の大隅良典博士です。

授賞式は、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り行われました。授賞式後両陛下ご臨席のもと、受賞者を囲んで地階食堂で記念茶会が催されました。

大村 智会員がノーベル生理学・医学賞受賞

第4分科の大村 智会員（天然物有機化学専攻）がウィリアム・カンベル氏、屠呦呦氏とともにノーベル生理学・医学賞を受賞することがスウェーデンのカロリンスカ研究所より発表され、平成27年12月10日、受賞しました。受賞理由は、「線虫類の寄生虫によって起こされる伝染病に対する新しい治療法に関する貢献」です。



<大村 智会員寄稿>

2004年9月西アフリカのガーナおよびブルキナファソのオンコセルカ症蔓延地域を訪ねイベルメクチンの集団投与による撲滅プログラムの進捗状況を視察することが出来ました。

このときこの熱帯病の悲惨極まりない状況を知ることが出来ました。また、イベルメクチンを用いる撲滅プログラムの対象となったアフリカ西海岸諸国で感染者が激減している様子を知り私自身人助けが出来たことを喜んだことを思い出します。

この撲滅プログラムはリンパ系フィラリア症と併わせてアフリカ全土に拡大され成功している事実がノーベル賞選考委員会に評価され、この薬の発見と開発に係ったメルク社のW. カンベル博士と共に2015年ノーベル生理学・医学賞を受賞することが出来たことは感慨無量であります。

第64回公開講演会のお知らせ

平成28年5月21日（土）、第64回公開講演会を近畿大学広島キャンパス（東広島市）において開催します。

東野治之会員は「「日本」という国号」、大村 智会員は「人類の健康と福祉を支える微生物の働き」というタイトルでそれぞれ講演を行います。

《開催日時》

平成28年5月21日（土）午後1時～4時10分

《会場》

近畿大学広島キャンパスメディアセンター・マルチメディア講義室
（広島県東広島市高屋うめの辺1）

《共催》

近畿大学

入場無料

必要事項を記入の上、下記まで事前にお申込みください。

定員140名、先着順。

<申込方法>

日本学士院ホームページから、またはe-mail、FAX、往復ハガキによる

<必要事項>

氏名（フリガナ）、住所、電話番号等連絡先

日本学士院公開講演会係

（〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32）

TEL: 03-3822-2101 FAX: 03-3822-2105

e-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp

http://www.japan-acad.go.jp/

「日本」という国号

東 野 治 之

日本はいつから「日本」なのか、「日本」とはどういう意味か、外国での呼び名ジャパンは何に基づくのか、こうした問いに正しく答えられる人は決して多くない。不思議なことに学校でも、まともに教わることはないと思う。私が専門とする歴史学は、過去を振り返って調べ、今を考える学問であるが、国号の問題は、まさに我々の歴史や文化を考える上に絶好の手掛かりになる。国号に対する関心が低いこと自体、歴史の結果なのである。そこでこの講演では、私のこれまでの研究に基づき、国号が定まっただけのいきさつや、その伝わり方をたどり、日本の歴史や国際交流の特色を述べてみようと思う。

人類の健康と福祉を支える微生物の働き

大 村 智

演者はこれまでに微生物代謝産物（天然有機化合物）に関わる研究を微生物の分離から始まり、探索系の構築、得られた化合物の構造決定、有機合成、生合成、作用機序および応用研究について研究を進めてきた。

これまで発見した天然有機化合物の中からプロテアソーム阻害活性を有するラクタシスチン、プロテインキナーゼ阻害活性を有するスタウロsporin、および寄生虫の神経伝達を阻害するエバーメクチンを例に挙げて優れた微生物の物質生産能が人類の健康と福祉に役立っている様子について述べる。

『学問の山なみ』から 一歴史をつくった会員一

130 年を超える学士院の歴史の中で、500 名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回 2 名を紹介します。

古市公威 ふるいち こうい

嘉永 7 (1854) 年ー昭和 9 (1934) 年

明治 39 (1906) 年 帝国学士院会員選定



江戸・姫路藩中屋敷の生まれ。明治 2 (1869) 年に開成学校 (東京大学の前身) に入学し、翌年、大学南校に改組されると藩の貢進生となった。明治 8 (1875) 年、フランスへ派遣され、エコール・サントラルとパリ理科大学を卒業した。明治 13 (1880) 年に帰国後、内務省土木局の技師となり、さらに東京大学理学

部講師を務めた。明治 19 (1886) 年に東京大学が帝国大学に改組された時、初代の工科大学長・教授となったが、引き続き、内務省の勤務も命ぜられた。

工科大学では、東京大学工芸学部と工部大学校を合併したことに伴う困難を解決し、工学教育の基礎を固めた。明治 21 (1888) 年には、帝国大学より初の工学博士、明治 36 (1903) 年には東京帝国大学名誉教授を授

けられた。内務省では、それまで外国人技師に頼っていた港湾・河川改修の設計や監督を行い、北海道の豊平川、新潟の信濃川、大阪の淀川等の治水工事や福井県の三国、横浜、東京、仙台、大阪等の築港を担当した。明治 23 (1890) 年に内務省土木局長・貴族院議員、明治 27 (1894) 年に土木技監となり、河川法や砂防法等、土木法規の整備に携わった。また、鉄道敷設にも関わり、逓信次官、鉄道局長心得、鉄道会議議長、鉄道作業局長官、京釜鉄道 (株) 総裁、東亜鉄道研究会理事長、統監府鉄道管理局長官、東京地下鉄道 (株) 社長を歴任した。

また、土木学会初代会長、理化学研究所第 2 代所長、学術研究会議初代会長、日本工学会初代会長を務め、大正 13 (1924) 年には枢密顧問官となった。帝国学士院では、明治 42 (1909) 年に第 2 部部長となり、13 年間その任にあった。日仏友好にも尽力し、東京仏学校 (法政大学の前身) を起こしたほか、日仏協会理事長、日仏会館理事長となった。昭和 4 (1929) 年に万国工業会議及び世界動力会議を東京で開催した際は、会長を務め、日本の工業発展を世界に紹介し、世界の技術者との交流の機会となり、同会議を成功に導いた。

(本稿の作成に当たっては、『学問の山なみ』の他、公益社団法人土木学会ウェブサイト等を参考にさせていただきました。)

吉田徳次郎 よしだ とくじろう

明治 21 (1888) 年ー昭和 35 (1960) 年

昭和 25 (1950) 年 日本学士院会員選定



神戸生まれ。明治 45 (1912) 年、東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業後、直ちに九州帝国大学講師となり、後に助教授、教授となった。昭和 13 (1938) 年に東京帝国大学教授に転任し、昭和 24 (1949) 年停年退職。昭和 25 (1950) 年に九州大学名誉教授となった。

大正 8 (1919) 年米国イリノイ大学で、タルボット教授について、コンクリートに関する研究をなして以来、学位論文となった「コンクリートの冷却に関する研究」を初めとし、研究成果は約 60 篇の論文に及んだ。それらの論文の中で、「ウォーカビリチーの研究」「ミキサへの材料投入順序に関する研究」「材料の分離に関する研究」「最高強度のコンクリートの製造方法の研究」「寒中コンクリートに関する研究」等は特筆に値すべき研究であり、また著書 7 編の中で『コンクリート及鉄筋コンク

リート施工法』『鉄筋コンクリート設計法』は当時最新の学理を網羅し、明快適切な説明を加えた名著である。

その他、わが国のコンクリート工事にあまねく適用される土木学会のコンクリート標準示方書は昭和 6 (1931) 年の制定以来、昭和 31 (1956) 年の改訂に至るまで、すべて吉田の努力の結晶として作成せられた。

吉田の指導したコンクリート工事の主なものを列挙すれば、宮崎県の塚原ダム、朝鮮半島・鴨緑江の水豊ダム、満州の第二松花江ダム、関門トンネル、愛知県丸山ダム、宮崎県の上椎葉ダム、静岡県佐久間ダム、東京都小河内ダムと当時世界的であったものが少なくない。

昭和 33 (1958) 年に米国のニューヨークで開催された第 6 回の世界大ダム会議に日本代表の一員として参列し、「ダム及びダムの基礎並にアバットメントに起こる応力及び変形の観測、これらの観測と計算及び小型模型試験結果との比較」という問題の総括報告者として、各国から提出された 59 篇の論文について、適切な結論を与え、わが国のダム技術の真価を諸外国に認識せしめた。

東京大学退職後も、コンクリート関係の諸規格については、ほとんど常に委員長としてその制定に努め、かつ日本工業標準調査会の土木部会長等に任じ、昭和 24 (1949) 年より 1 年間、土木学会会長、昭和 26 (1951) 年より 3 年間、日本学術会議会員を務めた。

(会員寄稿)

ワルラスの樫の木

根岸 隆 会員
(経済理論・経済学史)

(一)

ノーベル賞受賞経済学者たちによる「20 世紀における経済学への最も重要な貢献に関するシンポジウム」において、ケネス・J・アローは、20 世紀の経済学における最も重要な発展として、1. 不完全競争とゲーム理論、2. 情報の経済学、3. 一般均衡理論、4. 国民所得会計と消費および生産関数の推定、そして 5. 経済成長の発展、の 5 項目を挙げている (Arrow, 2001)。そして、「一般均衡理論」に関しては、「ワルラスにはじまる 19 世紀の理論には、1930 年代において、いくつかの独立した新しい展開がみられた。そのひとつは厳密性の要求であり、均衡の存在にかんする最初の証明がアブラハム・ワルトとジョン・フォン・ノイマンによって与えられた (後者の理論モデルはいっぷう変わったものであった)。フォン・ノイマンの理論とゲーム理論におけるナッシュによる均衡の存在証明からの数学的影響により、最終的な解明は、ライオネル・マッケンジー、ジェラルド・ドゥブリューと私、そしてタカシ・ネギシ (根岸 隆) によってなされた。そしてつぎに、一般均衡の方程式と不等式の数値的解法がハーバート・スカーフにより開発された。」と述べられているのである。⁽¹⁾

私がワルラスの一般均衡理論の勉強をはじめたのは、1956 年に東京大学大学院の経済学研究科に進学したころからである。「大学院入試の際の古谷先生の忠告もあり、安井琢磨先生のワルラスに関する一連の論文を読破しようと思った。当時すでに『均衡分析の基本問題』が出版されていて、その後編に収められていた「自励振動と景気循環」に魅せられて私は大学院の入試論文「巨視的景気変動理論と非線形微分方程式」を書いたのであったが、前編には「時間要素と資本利子—ワルラス利子理論の一研究」と「貨幣と経済的均衡—ワルラス貨幣理論に関する一研究」の 2 論文が収められていた。まず、『経済学論集』(東大経済学部の機関誌) で「純粋経済学と価格の理論」および「帰属理論と限界生産力説」を、それから『均衡分析の基本問題』の 2 論文、そして最後にまた『経済学論集』で「均衡分析と過程分析」を読んだ。安井先生ご自身は失敗作であると自認しておられたが、

昭和 8 年、東京都生まれ。
東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。米国スタンフォード大学助手、東京大学経済学部教授・学部長、青山学院大学国際政治経済学部教授、エコノミック・ソサエティ会長等を歴任。東京大学名誉教授。日本学士院賞、文化勲章を受賞・受章。



私はこの最後の論文から大きな衝撃をうけた。価格機能の動学的安定条件に関して、安井先生の定差方程式による分析はサミュエルソンの微分方程式によるそれに呼応の距離にまで迫っていたからである。」(根岸、平成 23 年、25 頁)。

(二)

ワルラスおよび安井教授とのご縁はまだ続く。安井琢磨著作集全 3 巻が 1970 年から 1971 年にかけて刊行された時、当時の理論計量経済学会 (現在の日本経済学会) から同学会の機関誌『季刊理論経済学』のために書評論文を執筆することを依頼された。すなわち、1972 年 5 月の同誌第 23 巻第 1 号に掲載された「安井琢磨教授と一般均衡理論の発展」(根岸、昭和 45 年) である。以下は同論文の冒頭の一節である。

「ひととは自分の行ったことに明確な認識をもたなくてはならない。もし収穫を急ぐならば、人参やサラダ菜を植えるべきである。しかしもし樫の木を植えるだけの野心があるならば、自分自身にこう言いかけざるべきであろう。わたくしの孫たちはこの緑陰をわたしに負っているのだ、と。」

これは安井教授が愛されるワルラスがその友人ジョルジュ・ルナールに書きおくとされる言葉である。私はこれを『ワルラスをめぐる』(安井琢磨著作集第一巻) に収録されている「レオン・ワルラス『純粋経済学要論』」の序文から引用しているのであるが、これはもともと『経済セミナー』(1957 年 10 月) から採録されたものであり、学生むけの解説文でもあることから安井教授は引用源をあきらかにしておられない。

ただ幸なことに、ワルラスはたいへん几帳面な人であって、自分の書いた手紙の原稿と自分が受け取った手紙のすべてを保存していた。そして、それらはすべてワルラス研究家の第一人者であるジャッフェ教授により整理、編集され公刊されている。すなわち、全 3 巻、大判、合計 2 千ページ余の『レオン・ワルラスの文通および関係書類』(Jaffé, 1965) である。ワルラスが書いた、そして受け取った手紙合計 1783 通がすべて収録されている。

さっそく、ワルラスからジョルジュ・ルナールへの手

紙を調べてみると、1893年から始まり、1909年まで全部で17通ある。⁽²⁾ 最初の手紙は、ワルラスの業績を評価し、そのフランスにおける冷遇を論難したルナールの論文に関するものである。ところが、ワルラスの17通の手紙のいずれにも「榎の木」の話は登場しない。このことに気づいたときには、残念ながら安井先生はすでになくなっておられ(1995年没)、途方にくれた。そこで、餅は餅屋と、国際ワルラス学会の会長である御崎加代子教授にうかがってみた。御崎教授はさっそく国際学会で多くのワルラス専門家に訊いてくださったが、意外なことにワルラスの榎の木の話は誰も知らないということであった。

しかし、専門家というのはありがたいもので、御崎教授はその後も調査を続けてくださり、なんと問題の手紙はルナール氏あてではなく、ルナール夫人(Louise Georges Renard)あてのワルラスの手紙であることを付き止められた。⁽³⁾ ワルラスからルナール夫人への手紙は全部で21通ある。⁽⁴⁾ その中の1通、1903年4月13日の書簡⁽⁵⁾に、上掲の安井教授が引用された一節が存在するのである。⁽⁶⁾

(三)

しかし、問題はいぜんとして残る。ワルラスのルナール氏宛ての手紙と同夫人宛ての手紙とを混同されたとしても、そもそも安井教授はこのワルラスの「榎の木」の話をいったいどこから引用されたのであろうか。1957年に安井教授が『経済セミナー』に「レオン・ワルラス『純粋経済学要論』」を執筆された時には、もちろんジャッフェ教授の『レオン・ワルラスの文通および関係書類』(Jaffé, 1965)はまだ出版されていない。また、御崎教授が指摘されるように、1935年のジャッフェ教授の論文(Jaffé, 1935)にも、「榎の木」は登場しないのである。学術雑誌に掲載された論文ではなく、学生むけの啓蒙雑誌に書かれた解説であったために、安井教授の引用源は不明なのである。⁽⁷⁾ 安井先生は、いったいどこからワルラスの「榎の木」を日本に移植されたのであろうか？

注

- (1) ネギシの存在証明に言及されているひとつの理由は、スカーフの数値的解法との関連が考えられる。Kehoe, T. J., T. N. Srinivasan and J. Whalley, (eds.), 2005, をみよ。
- (2) すなわち、Jaffé(1965)の第二巻、597ページに収録されている書簡1169号(1893年)から、第3巻、387ページに収録されている書簡1722号(1909年)までの17通である。詳細は、第3巻、456ページをみよ。
- (3) 平成12年1月18日付の小生宛て書簡。

- (4) すなわち、Jaffé(1965)の第三巻、125ページに収録されている書簡1460号(1900年)から、第3巻、403ページに収録されている書簡1738号(1909年)までの21通である。詳細は、第3巻、456ページをみよ。
- (5) すなわち、Jaffé(1965)の第3巻、224 - 226ページに収録されている書簡1543号(1903年4月13日)である。
- (6) また、これとは別に、御崎教授からは、平成11年11月19日の小生宛書簡で、「ローザンヌ大学のブリーデル教授が1996年に公刊されたワルラス『要論』の書評集(Baranzini, 1996)の冒頭にも、安井先生が引用されていたワルラスの言葉が引用されていることをご教示いただいた。
- (7) 埼玉大学の柳沢哲哉教授にこの問題に関するご教授に感謝する。

文 献

- 根岸 隆、安井琢磨教授と一般均衡理論の発展、『季刊理論経済学』、23巻1号、昭和47年、19～27頁。
- 根岸 隆、『一般均衡論から経済学史へ』、平成23年、ミネルヴァ書房。
- 安井琢磨、レオン・ワルラス、『純粋経済学要論』、『経済セミナー』、1957年10月号(『ワルラスをめぐる』、33～45頁)。
- 安井琢磨、『ワルラスをめぐる』、昭和45年、創文社。
- Arrow, K. J., 2001, The five most significant developments in economics of the twentieth century, *The European Journal of the History of Economic Thought*, 8-3, Autumn, pp.298-304.
- Bridel, P., 1996, *Le chêne et l'architecte*, Genève : Librairie Droz S. A.
- Jaffé, W., 1935, Unpublished Letters and Papers of Léon Walras, *Journal of Political Economy*, 43, 187-207.
- Jaffé W., (ed), 1965, *Correspondence of Léon Walras and Related Papers*, Amsterdam : North-Holland Publishing Company.
- Kehoe, T. J., T. N. Srinivasan and J. Whalley, (eds.), 2005, *Frontiers in Applied General Equilibrium Modeling*, Cambridge : Cambridge University Press.
- (本寄稿は、平成27年10月24日に行われた公開講演会の要旨です。10ページ参照)

第6回日本学術振興会育志賞授賞式

平成28年3月2日、独立行政法人日本学術振興会主催による日本学術振興会育志賞授賞式が本院を会場として挙行されました。

同賞は、天皇陛下のご即位20年に当たり、社会的に厳しい経済環境の中で、勉学や研究に励んでいる若手研究者を支援・奨励するための事業の資として賜った御下賜金を元に、将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰することを目的として、創設されました。

授賞式は、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り行われました。授賞式後両陛下ご臨席のもと、受賞者を囲んで地階食堂で記念茶会が催されました。

会員の逝去

平成 27 年 10 月以降、次の方々が逝去されました。

<会 員>

秋山 虔 会員 (第 1 分科、日本文学専攻)

平成 27 年 11 月 18 日 享年 91 歳

田村三郎 会員 (第 6 分科、生物有機化学専攻)

平成 27 年 12 月 4 日 享年 98 歳

石本泰雄 会員 (第 2 分科、国際法専攻)

平成 27 年 12 月 8 日 享年 91 歳

早石 修 会員 (第 7 分科、生化学・医化学専攻)

平成 27 年 12 月 17 日 享年 95 歳

京極純一 会員 (第 2 分科、政治学・政治過程論専攻)

平成 28 年 2 月 1 日 享年 92 歳

会員の近刊紹介

- ・田仲一成『中国鎮魂演劇研究』東京大学出版会、平成 28 年 1 月
- ・荒井 献『ユダとは誰か 原始キリスト教と『ユダの福音書』の中のユダ』講談社学術文庫、平成 27 年 11 月
- ・青柳正規『文化立国論 日本のソフトパワーの底力』ちくま新書、平成 27 年 10 月
- ・B. ビショップ著、佐藤彰一(瀬戸直彦氏と共訳)『西洋写本学』岩波書店、平成 27 年 9 月
- ・パスカル著、塩川徹也訳『パンセ(中)』岩波文庫、平成 27 年 10 月
- ・蘭田 坦『無底と意志 形而上学 ヤーコブ・ベーム研究』創文社、平成 28 年 1 月
- ・芦阪直行編『ロボットと共生する社会脳 神経社会ロボット学(社会脳シリーズ 9)』新曜社、平成 27 年 10 月
- ・河本一郎(川口恭弘氏と共著)『新・日本の会社法』商事法務、平成 27 年 12 月
- ・河本一郎『手形法における悪意の抗弁(商事法研究 第 3 巻)』成文堂、平成 28 年 3 月
- ・中野貞一郎(下村正明氏と共著)『民事執行法』青林書院、平成 28 年 1 月
- ・樋口陽一(小林 節氏と共著)『「憲法改正」の真実』集英社新書、平成 28 年 3 月
- ・菅野和夫『労働法 第 11 版』弘文堂、平成 28 年 2 月
- ・鈴木茂嗣『二元的犯罪論序説』成文堂、平成 27 年 12 月
- ・藤田宙靖『行政法入門 第 7 版』有斐閣、平成 28 年 2 月
- ・竹内 啓『数理統計学の考え方 推測理論の基礎』岩波書店、平成 28 年 3 月
- ・佐藤勝彦『14 歳からの宇宙論』河出書房新社、平成 27 年 10 月
- ・別府輝彦『見えない巨人 微生物』ベレ出版、平成 27 年 11 月
- ・喜田 宏(木村 哲氏と共編)『人獣共通感染症 改訂 3 版』医薬ジャーナル社、平成 28 年 3 月

- ・井村裕夫『健康長寿のための医学』岩波新書、平成 28 年 2 月
- ・岸本忠三(中嶋 彰氏と共著)『現代免疫物語 beyond 免疫が挑むがんや難病』講談社ブルーバックス、平成 28 年 1 月

編集後記

今回発行しました第 17 号のニュースレターでは、平成 28 年度日本学士院賞受賞者の研究業績の紹介や第 12 回学術奨励賞の受賞者紹介及び寄稿のほか、講演会レポートや新会員選定などについてお伝えしています。

ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より御礼申し上げます。

今号の講演会レポート(10 ページ)の 2 つ目に「学びのスメシシリーズ講演会」の記事がありますが、もう少し詳しく報告させていただきます。この講演会は、これまで中学生・高校生を主な対象として、一般の方の聴講もお受けしておりましたが、昨年の第 8 回は、講師の山中伸弥会員のご意向で、中学生・高校生 50 名に限定して開催しました。講演後のアンケートには、「失敗の中から成功のヒントを見つけるという話は今後の人生でもとても役立つものだった。」「すべては地道な努力からという気持ちでがんばっていかうと思った。」「細胞以外の話もとても学びの多い話でこれからの学校生活に活かしていきたいと思った。」といったような主催者側にとっても喜ばしい感想が多く見られました。

また、日本学士院では一般の方々を対象に、毎年春・秋 2 回「公開講演会」を開催しています。春季は全国各地、秋季は上野の本院会館での開催となりますが、今春は 5 月 21 日(土)、近畿大学広島キャンパス(東広島市)において開催します(お知らせ 12 ページ)。皆様のご参加をお待ちしております。(H)

※受賞者、新会員、新客員の肩書きは、発表当時のもの。

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32

電話：(03)3822-2101

FAX：(03)3822-2105

E-mail：jimu@japan-acad.go.jp

第 17 号：発行日：平成 28 年 4 月 28 日

(年 2 回 4 月、10 月発行)

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>